

# 真鶴一九六三

## 日本最初の彫刻シンポジウム

柴田葵

「文化財だより」第二十二号、真鶴町教育委員会、平成二十一年三月

### 東京オリンピックの前年

一九六三（昭和三十九）年、日本は東京オリンピックの開催で沸き立っていた。その時代を直接経験した人々もそれ以後の世代でも、日本人で東京五輪を知らない人はいないだろう。また、当時丹下健三によって設計された国立代々木競技場は、日本が誇る近代建築の傑作として名高い。

しかし、オリンピックや競技場のことは誰もが知っていても、その前年、東京五輪の関連事業として「世界近代彫刻シンポジウム」という野外彫刻の祭典が、真鶴町の海岸を主たる舞台として行われたこと、そしてその彫刻作品が五輪期間中、代々木競技場の周囲に飾られていたことは、あまり知ら

れていないのではないだろうか。

実は「文化財だより」には、このシンポジウムについて解説した記事として、川ノ邊昭治「世界に羽ばたく小松石」(二〇〇三年三月第十六号)が過去にある。そこでこの小文では最新の研究成果を反映しつつ、真鶴の彫刻シンポジウムが持つ歴史的な意義と位置づけについて書きたいと思う。

### 彫刻シンポジウムとは

今から半世紀前のこと、世界が冷戦体制下にあった一九五八年、一人のオーストリア人彫刻家が、「境界石」と題する挑戦的な彫刻作品を、オーストリア／ハンガリーの国境付近に設置した。その彫刻家カール・プラントル(一九二

三)は、東西陣営の壁・国境や人種の壁を越えて、彫刻家たちが共同の場で連帯しながら芸術を営むユートピアを夢見ていた。

翌年、彼は志を同じくする仲間たちと共に、その理想の実現に向けて動き出した。ウィーン郊外の石切り場ザンクト・マルガレーテを舞台として、石彫刻の饗宴彫刻シンポジウムを開催したのである。石切り場にはヨーロッパ七ヶ国から十一名の作家たちが集まり、彫刻の野外制作を行った。人工灯の下から、自然の陽光と風の中へ。アトリエの密室から、石切り場の野外空間の中へ。黙々とした孤独な制作から、仲間と共に語り合い議論を交わす創造行為へ。シンポジウムは作家たちにとって、

それまで経験することのなかった  
新たな境地をもたらすものだった。

最先端の潮流であった「野外彫刻」  
の理念を取り入れ、彫刻シンポジウムとして実現したものだ。

## 日本最初の彫刻シンポジウム

プラントルが創始したこの「彫刻シンポジウム」は、国際的に活躍する彫刻家たちによって、世界各国に広まっていった。早速一九六一年にはドイツとユーゴスラビアで、一九六二年にはイスラエルで、それぞれシンポジウムが開催されている。日本で最初の彫刻シンポジウムが開催されたのは、一九六三年のことである。

また、作家の側からこのシンポジウムを組織化したのは、フランスを主な活動拠点とする彫刻家の水井康雄である。水井はその最初からヨーロッパのシンポジウムに積極的に参加し、日本人作家としては彫刻シンポジウムの先達的な役割を果たした彫刻家だった。

プログラムとしては、まず世界各国から参加した十二名の彫刻家たちが、真鶴の道無海岸を舞台に現地から産出される小松石（安山岩の一種）を素材とした彫刻制作に取り組む（一九六三年七月一日～九月三〇日）。完成した作品を新宿御苑で展示し（十月五日～三十

一日）新宿・小田急百貨店にて世界近代彫刻シンポジウム小品展」を行う（十二月六日～十一日）。そして五輪期間に代々木競技場の周囲に作品を飾る（一九六四年の十月十日～二十四日）という多彩な内容であった。参加した作家と作品については、次の通り。

・アウグスティン・カルデナス（キューバ、1927）「真鶴の夏の鳥」  
「真鶴の夜の鳥」

・ロベール・クーチュリエ（フランス、1905）「グループ」  
・モリス・リプシ（フランス、1898）「大洋的No.1」「大洋的No.2」  
・ヘルベルト・パウマン（ドイツ）  
「海」  
・カルロ・シニョーリ（イタリア、1906）「安山岩の心に」  
・アントワーヌ・ポンセ（スイス、1928）「広島と長崎に捧ぐ」

・本郷新（1905）「馬の石」  
・野水信（1914）「Manazuru」  
・水井康雄（1925）「道無63」  
・毛利武士郎（1923）「祭殿」  
・鈴木実（1930）「儀式No.3」儀式No.4」  
・木村賢太郎（1928）「人間像」

シンポジウムの意義と位置づけ  
作家たちの国際的交流 真鶴の海岸での公開制作、新宿御苑での野外展示、そして代々木競技場という建築空間への彫刻設置という具合に、当時としては全く画期的な試みを行った世界近代彫刻シンポジウム。一九六〇年代の日本の

シンポジウムの意義と位置づけ  
作家たちの国際的交流 真鶴の海岸での公開制作、新宿御苑での野外展示、そして代々木競技場という建築空間への彫刻設置という具合に、当時としては全く画期的な試みを行った世界近代彫刻シンポジウム。一九六〇年代の日本の

野外彫刻はその後、山口県宇部市の「宇部の彫刻」の活動などを中心に発展していくようになるが、野外彫刻運動の盛り上がりを実地に後押ししたのが、このシンポジウムだったと言える。

また世界的な視野から見ても、シンポジウムが国際的に伝播していく過程において、「石から石へ」と交流が繋がる結節点の一つとして、このシンポジウムは機能していた。彫刻シンポジウムを通じて、彫刻家たちの世界的なネットワークはより広範で密に形成されていくようになり、真鶴で育まれた作家たちの交流は、例えばその後一九六八年のグルノーブル彫刻シンポジウム（フランス）などに、直接的な影響を及ぼしていると言え

る。世界近代彫刻シンポジウムは一度きりの企画ではあったが、ザンクト・マルガレーテンやユーゴスラビアの「フォルマ・ビバ」など伝統ある彫刻シンポジウムと並んで、シンポジウムの歴史の礎にあたる、初期の事例の一つとして数えられてよいものだろう。

### おわりに

真鶴のシンポジウムの歴史的意義や興味深さを、この拙文で十分に伝えることができただろうか。

実は、真鶴にとっては一つ惜しまれることがある。それは、当時制作された彫刻作品や、シンポジウムの記憶を伝える石碑、当時の面影を残す石切り場などが、現在の真鶴にはほとんど残されていない

という点だ。彫刻作品については、オリンピックで代々木競技場に飾られたあと、一九七〇年以来、宗教学者P.L教団の大平和記念塔（大阪・富田林）に付属する、「彫刻の庭」へ記念碑と共に移設されている。また、道無海岸の石切り場は、崖崩れの危険性のため十一年以上前から埋め戻し作業を行っており、今そこに当時の雰囲気を求めるのは難しい状況だ。

このように形として残されたものは皆無に近いが、一九六三年のシンポジウムの制作・展示風景を実際に見聞した人々の記憶は、まだどこかに残されているはずだ。今から遡ること四十六年前、夏の真鶴に十二名の彫刻家たちがやって来たこと、石の塊と取り組んで

彫刻を作っていたことなどを、僅かにでも覚えている人がいるとしたら、ぜひともその記憶を誰かに語り伝えてほしいと思う。この研究がもし、真鶴のシンポジウムの記憶の再生と語り伝えに少しでも役立つところがあれば、筆者としては望外の喜びである。

（謝辞）本稿の執筆にあたり、真鶴町教育委員会の岩本幹彦さんにお世話になったことをお礼申し上げます。